



年 組 名前

道新でワークシート

弟子屈のアイヌ民族資料館訪問

屈斜路コタン

「文化を身近に」

【弟子屈】アイヌ民族の暮らしや文化を伝える町立「屈斜路コタンアイヌ民俗資料館」。新緑がまぶしい季節を迎え、湖畔の散策と合わせて楽しめる同館を訪ねた。

(山本忠彦)

同館は、1982年に屈斜路湖畔の屈斜路市街にオープン。伝統的な衣装や生活民具など450点を常設展示する。アイヌ民族とゆかりのある地元町民から寄贈、寄託された資料が多いという。

本年度から、チセ(住居)内部の再現コーナーを設け

た。2畳ほどのスペースにキナ(ゴザ)を敷き、シントコ(食料や酒などを入れた容器)、エトヌプ(片口)、トゥキ(杯)などを配置。係員に申し出れば、一部展示品はふれることができる。地元女性グループが作製した衣装の試着もでき、片岡佑平学芸員(30)は「アイヌ文化を少

しでも身近に感じてほしい」と話す。

コタンの生活を支えた狩猟については、弓や矢、小刀といった道具を展示。アイヌの人々は和琴半島にエゾシカの群れを追い込んで狩りをしてきたとされ、その様子をジオラマ模型で見る事ができる。ヒクマの霊送りのスライド上映(約9分間)は、屈斜路湖畔で40年ほど前に行われた儀式の貴重な記録だ。外国人客のために、昨年から英語の字幕による儀式の解説を加えた。

幕末に屈斜路湖畔のコタンに滞在した探検家松浦武四郎



建築家・故毛綱毅曠さんがデザインした民俗資料館

上・民具を並べてチセ(民家)の内部を再現した展示コーナー

に関する資料も並ぶ。武四郎が作った地図「東西蝦夷山川地理取調図」の部分図を一枚につなぎあわせた複製(町民から寄託)は、縦2.4メートル、横3.6メートルと見応えがある。

同館では、かつて和琴半島にあった旧和琴博物館の資料約6500点(アイヌ関連は約300点)を所蔵する。旧和琴博物館は、釧路市立博物館の初代館長・故片岡新助さんが1956年に開設。92年の閉館後、多くの収蔵品が町に移管されたためだ。民俗資料館では一部を常設展示しており、アイヌの衣装やタマサイ(首飾り)、ニンカリ(耳飾り)といった装飾品などが目を引く。

町の元学芸員永田等さん(69)は「片岡新助さんが昭和30年ごろまで収集した資料の一部と思われる。入手場所や年代は不明だが、民具の多くは道東各地のコタンに由来するものではないか」と推測する。

釧路市出身の建築家・故毛綱毅曠さんがデザインした民俗資料館の建物自体も見どころだ。ユニークな外観を眺めながら湖畔を散策すると、近くに和琴半島が見える。エゾシカ猟のジオラマを思い出しながら、かつてのアイヌの人々の暮らしを想像するのも面白い。

チセ再現◆クマの霊送り映像◆武四郎の地図

2019年6月3日夕刊 釧路・根室版 (記事は再編集しています)

①記事の本文や写真に「チセ」という言葉がありますが、これは何の意味ですか。

②あなたはアイヌ民族のことに、どんなことが知りたくなりましたか。調べてみたいテーマを書きましょう。